Faculty Development

September 2012 第２号

日本大学 FD NEWSLETTER

自主創造 日本大学

CONTENTS

特集①

学生からの意見を直接聴く“場”として —
『日本大学ＦＤガイドブック2012』を基にした学生と教職員の意見交換会 2

連載第１回

部科校における学習支援等の事例紹介
【通信教育部】 3

連載第２回

授業改善のための
ティーチングティップスの収集と情報提供
——「医学部における医学英語教育」 3

特集②

学生参加型のＦＤ活動に向けて
——文理学部における学生FD活動の現状
——「学生ＦＤイベント」参加レポート 4

〔Cover Photo〕
生物資源科学部付属農場環境制御温室で開花期調節されたマリーゴールドの栽培管理を行う植物資源科学科１年生の実習
（担当教員：生物資源科学部教授　野村 和成）

日本大学 FD NEWSLETTER
September 2012 第2号

特集 ①

学生からの意見を直接聴く“場”として ―

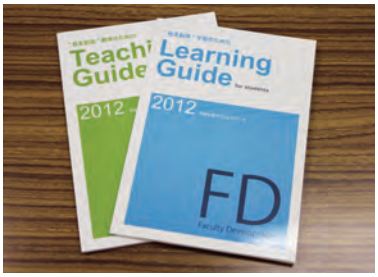
『日本大学ＦＤガイドブック2012』を基にした学生と教職員の意見交換会

平成24年7月19日（木）開催

平成24年7月19日に日本大学桜門会館において開催された『日本大学ＦＤガイドブック2012』を基にした学生と教職員の意見交換会の内容を紹介します。

FD推進センターでは，平成24年4月，新たに『日本大学FDガイドブック2012』を発行し，既に各学部及び短期大学部で活用されています。

今般，同ガイドブックを実際に使用する学生の皆さんから直接意見を聴く“場”を設け，今後，より有用な教育・学習支援ツールとすることを目的とし，4学部（法，文理，経済，生産工）5名の学生と全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループの教員・職員との間で意見交換会を開催しました。ドラフトを基に行った昨年度に続き，今回が2回目の開催となります。



森和紀教育情報マネジメントWGリーダー（文理学部教授）

テーマA 学生から見た『日本大学ＦＤガイドブック2012』

昨年度の意見交換会にも参加していただいた4年生のテーブルと平成24年4月に入学し実際に『日本大学FDガイドブック2012』を手に取り活用した1年生のテーブルに分かれ，「学生から見た『日本大学FDガイドブック2012』」というテーマで意見交換を行いました。参加学生の皆さんからは，表紙デザインに関する意見から記述内容に関する意見まで，多様なコメントが寄せられました。

例えば，「GPAに関する具体例の記述がよい」との意見に加え，学生の動機をより高めるために「GPAの意味だけではなく，活用方法もあるとよい」や「1年次から目標が明確になってよい」との意見もありました。また，「授業態度の改善」という視点では，「学生が頑張ることにより，教員も職員も意識が高まる」とのコメントがあり，三者が一体となった授業改善を望む声もありました。

さらに，4年生からは「手引きのように使って欲しい」との声がある一方，1年生から「存在自体が知られていない」とのコメントもありました。

学部ごとでキャンパスが分散している日本大学にとって，思いを共有することは難しい面もありますが，“日本大学人”としての気風を養うために，『日本大学FDガイドブック』が各学部等で活用されるよう努めることが課題に挙げられます。

テーマB “自主創造”ってなに？

次に，参加者全員により日本大学の教育理念・目的である“自主創造”について，特に“日本大学における学び”のプロセスと将来の自分を捉えながら自由に意見交換していただきました。

「自分の未来を自主的に創っていくこと」「大学も学生と一緒になって自主性の在り方を考えることが大切」「日本大学の自由に学べる雰囲気がよい」「自分で動くことを身につけさせてくれた日本大学に感謝」「“自主創造”の考え方には『責任』が含まれている」「自分のやりたいことや進むべき道を自分で考えること」など，参加学生の皆さんは“日本大学人”として自覚と責任を感じておられました。親子2代で日本大学という学生が数名おり，また，「『日本大学進学ガイド』で“自主創造”が目に留まりました」という学生もいるなど，“日本大学人”としてのアイデンティティーの定着を実感しました。

伊東 里紗さん（法学部4年）

藤田 之彦准教授（医学部）

髙柳 真由さん（文理学部1年）

伊藤 雄太さん（経済学部1年）

石島 成量さん（法学部1年）

品田 泰崇 学務部教育推進課課長補佐

並木 洋明 学務部教育推進課長

前田 淳志さん（生産工学部4年）

関根 二三夫教授（通信教育部）

最後に，森和紀教育情報マネジメントワーキンググループリーダー（文理学部教授）が「大学（教職員）は，学生が学修を充実させる“土俵づくり”に努めることが大切」と述べられました。

部科校における学習支援等の事例紹介【通信教育部】

連載第1回

――― 多様な科目履修の方法や学習モチベーション維持の不安に，全国に配置した指導員が応える

通信教育部におけるFDの取り組みで特徴的なのは学習センターの存在です。学習の向上と通信教育の普及を目的に昭和57年に設置された学習センターは，現在，東京都千代田区三崎町にある通信教育部や付属高等学校など全国18か所に置かれ，7千名の学生から年間2千件近い相談を受けています。「通信教育部の場合，学士の学位や資格の取得など目的が多様なために，科目履修の方法に関する相談が多く寄せられます。また，通学生と異なり，学習のモチベーション維持が難しいため，その不安を取り除いてあげることも重要です。入学前から支援を開始し卒業するまでカバーしています」と，東京都学習センター指導員の北村周之氏は説明します。

●学習センターの相談風景

通信教育部 東京都学習センター
指導員 北村 周之氏

通信教育部 東京都学習センター
指導員 上島 美佳氏

通信教育部には，18～90歳代まで幅広い学生が在籍していますが，最も多い年代は30～40歳代です。この年代は，大学生の時に習わなかった分野を学び，現在の仕事に活かしたいというケースや，教員免許を取りたいなどの目的が多いようです。「通信教育部は最短4年で卒業できますが，8～9年かける学生も珍しくありません。入学当初つまずいても焦る必要はないと元気づけることもよくあります。また，学習センターを利用する学生は卒業率が高い」と北村氏は言います。「必修科目である英語のリポートで苦労する学生が多く，これは社会に出て20年以上英語から離れている方が少なくないからのようです。過去の英語リポートを参考に見せるなどして，取り組み方をアドバイスしています。」と，同じく指導員の上島美佳氏は語ります。

通信教育部では，卒業生を中心に指導員を採用しており，3年ごとに全国の指導員を集めた研修会を開催して，指導の質向上と問題共有を推進しています。

平成24年度 通信教育部指導員研修会の様子

授業改善のためのティーチングティップスの収集と情報提供

連載第2回

――――「医学部における医学英語教育」

医療において英語が国際共通言語となっている現在，医師にとって英語は必須です。日本大学医学部では，実践的な英語能力を養うため，約300時間にわたる6年一貫医学英語教育を行っています。具体的には，卒業時に全ての学生が「英語で医療面接（診察）ができる」「英文の医学教科書を読める」という2つのスキルを身につけていることを目標としています。学内外から高く評価されている本学部の医学英語教育に関して，その特徴を“AID”というキーワードで紹介します。

Applicability（実践性にこだわった学習）

実際の医療で活用できるものであるべきという視点から，実践性（applicability）を「学習内容」と「評価方法」の2点において重視しています。「学習内容」においては，英語圏の医師や患者が実際に使う表現，実際の口頭症例プレゼンテーションで使われている表現など，医師として実際に使用する表現や作法を学習内容としています。「評価方法」においても，筆記試験だけでなく，医療面接や症例プレゼンテーションといった実技試験を導入しています。

Daniel Salcedo, M.D.（白衣）による医学英語（2年次）の講義：Massachusetts General Hospitalの講師Jordan T. Shin, M.D., Ph.D.（中央正面）を招待しての特別講義

Integration（医学教育との統合）

学習効果を高めるため，すべての医学英語教育の内容は日本語で行われている医学教育と統合（integration）するように設計されています。これによって，「医学英語を教育する」のではなく，「医学を英語で教育する」ということが可能となるのです。そのため，医学英語教員として3名の医師（2名は英語圏の医師）及び2名の英語圏出身の医学コミュニケーション専門家を配置しています。

Diversity（多様なアクティビティ）

本学部の医学英語教育は600名を超える全学生を対象とした必須科目です。必須授業には，海外から医師を招いたり，授業以外にも米国医師資格試験対策のワークショップや医療英会話セミナーといった課外活動を数多く提供するなど，多様性（diversity）のある授業や課外活動を可能としています。

各分野において専門性を持った英語（English for Specific Purpose）が求められる現在，この“AID”は制限の多い学部における専門英語教育において高い学習効果を持つと考えられます。

（医学部 医学教育企画・推進室助教　押味 貴之）

特集② 学生参加型のＦＤ活動に向けて

ＦＤ活動は従来，授業改善を目的とする教員の教育能力向上への組織的な取り組みを中心に進められてきましたが，近年ではこういった狭義の概念から脱却し，在学中の学生生活を改善し充実させるための活動をも幅広く視野に入れるようになってきました。学生生活の充実度を裏づける大きな要因は授業に対する満足度であるとの実態調査の結果が示すとおり，“学生ならではの視点”を重視し，教員・職員・学生がそれぞれの役割を確実に果たした上で，三者が一体となって大学教育の改善を推進することが重要です。延いてはこのことが，教育力向上の具現化に繋がり，「学生参加型のＦＤ活動」が大学を変える原動力の一翼を担う力として位置づけられる所以であると考えられます。

（文理学部教授　森 和紀）

特集②-1 文理学部における学生ＦＤ活動の現状

前号記事「学生の視点からＦＤを考える」において，文理学部では学生によるＦＤ活動のチームが発足する運びであることを紹介させていただきました。その後，文理学部ＦＤ委員会を中心として関連する委員会・部署における何回かの検討・審議を経た結果，学生によるＦＤ活動は，「教員・職員・学生による三位一体のＦＤ活動」として位置づけられるものであるということが再確認され，したがって，学生によるＦＤ活動の組織を，文理学部ＦＤ委員会の下部組織として設置し，ＦＤ委員会による指導・監督のもとに，学生にＦＤ活動に加わってもらう，ということが正式に決まりました。

具体的には，ＦＤ委員会の内規を，(1)ＦＤ委員会での審議事項として新たに「学生によるＦＤ活動の取り組みへの支援に関する事項」を付け加えること，および，(2)学生によるＦＤ活動を指導・監督する「専門委員会」をＦＤ委員会の下部組織として設置すること，以上２点を主として改正しました。

そうした規約の改正と並行して，「学生ＦＤワーキンググループ」のスタッフが何名か集まり，学生によるＦＤ活動がすでに始まっています。今年度の主な活動としては，学部内では，(a)プロジェクト教育科目（総合教育科目の中に位置づけられる科目で，文理学部学生が企画・立案できるものです）への応募，(b)Newsletterの発行，学外では，2013年３月に開催される「学生ＦＤサミット2013春」で発表を行うことを計画しています。

「学生ＦＤサミット2012冬」（2012年２月25日～26日，追手門学院大学）において，文理学部における学生ＦＤ活動の取り組みを紹介する文理学部学生。

（文理学部教授　古田 智久）

特集②-2 「学生ＦＤイベント」参加レポート

日本大学では，ＦＤの定義を「自主創造の理念の下に日本大学を取り巻く外的諸要因をも分析して，－中略－，それを実行するため，教員が職員と協働し，学生の参画を得ながら組織的に取り組む諸活動」と定めています。果たして“学生参画型のＦＤ”とはどのようなものかと考えながら，２つのイベントに参加しました。

2012年２月25日・26日に追手門学院大学で開催された「学生ＦＤサミット2012冬－大学を変える，学生が変える－」では，まさに“一皮むける”体験をしました。追手門学院大学学生ＦＤスタッフによる緻密なプロデュースはもとより，学生・教員・職員が自由に意見を交わす“気づき”の場として設定された「しゃべり場」は，参加者全員に“感動”と“新鮮な感覚”をベースとした“新たな気づき”を与えたと感じています。また，分科会「職員レーン」で発表させていただく機会をいただいたことは，本学のアピールと自身の成長に繋がり，感謝しています。

2012年３月10日に法政大学で開催された「学生ＦＤ NEXT １～集まろう！繋がる点と，広がる輪～」は，関東４大学の連合組織である「関東圏ＦＤ学生連絡会」が主催であったことから，大学間の連携によるＦＤ活動の有効性を感じました。また，このイベントでの「しゃべり場」は，グループごとに成果を発表し，それに対するフロアの反応をクリッカーで瞬時に捉えることを試みているなど，それぞれの企画主体により，個性を見出し工夫している姿を感じとることができました。

「学生ＦＤ NEXT1」（2012年３月10日，法政大学）において，「しゃべり場」の成果を発表する本学学生。

２つのイベントに共通していえることは，参加する学生や教職員が決して自大学を批判することなく，極めて純粋に“大学をより良くしたい”との思いから企画・交流していたということです。このような“場”づくりに努める必要があると感じました。

（学務部教育推進課　大嶽 龍一）

日本大学 FD NEWSLETTER 第２号
発　行　日：平成24(2012)年９月１日〔年２回（４月，９月）発行〕
発　行　者：日本大学ＦＤ推進センター　センター長 牧村正治
〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24　電話:03-5275-8314　FAX:03-5275-8315
☐ e-mail:adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp　☐ http://www.nihon-u.ac.jp/about_nu/effort/fd-center/
所管部署：日本大学 本部 学務部教育推進課
企画・編集：全学ＦＤ委員会

「日本大学FD NEWSLETTER」に関する御意見や御感想などがありましたら，学務部教育推進課（adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp）へお寄せください。

本ニューズレターに掲載した文章，写真等の無断転載・複製を禁じます。　Copyright（C）Nihon University 2012 All Rights Reserved.